



この作品は『いしい平均』（2000年11月～2003年4月）に連載されたものです。

- 平成 15 年 5 月 15 日初版発行
- 著者・発行者 石井 赳夫
- 制作 中山編集事務所

©Takeo Ishii 2003 printed in Japan

キャッチャー（C）「おい、調子が良いからって、やたらストリートばかり投げるんじゃないよ」

ピッチャー（P）「てやんでえ。俺は曲がったことは、でえきれえ（大嫌い）だ」

C「よく聴けよ。世の中じゃ回り道とかワンクッションとかも必要なんだ。岐阜の長良川で、人間が直接鮎を手づかみにしてもいいんだが、わざわざ鵜を使って捕っているんだ。知っているだろう？」

P「それくれえ、俺でも知ってるなあ。おめえ、くどくどと何が言いてえんだ」

C「よくぞ尋ねてくれた。これが有名な長良川の迂回（鵜飼）だ」

2

息子「てえへん（大変）だ。いまケイタイで連絡が入って、親父が重体だってんだよ」

母親「つい今朝がたまでピンピンしていたのに、何だい急病かい怪我かい。して、どっから、言ってきたんだい？」

息子「急患だか外来だかみたいに関こえたんだが、いまいち分からねえ」

母親「要領を得ないねえ。私がお父っあんのケイタイにかけてみるよ。……プシュッ、プシュッの後……何だね驚かすんじゃないよ。外環の高速道路で渋滞だってえことだとき。あああ、やれやれ」

1

弟「この手紙、文字は分かるんだが、意味がさっぱりしななんだ。おせえて（教えて）くれ」

兄「何、私の病気はオンナオンナよくなるでしょう。ふーむ、ふざけてやがる。こりゃあ、オトコオトコってことだよ」

弟「よけい分からなくなっちゃったぜ」

兄「ハハハ。女女に（徐々に）よくなるてえだから、男男と（段段と）ちゅうこった」

4

A「いやあ、この頃は『おはよう』だとか、『今日は』なんて台詞を全然言わねえ奴が増えて、不愉快だな」

B「そりゃ、そいつらにも考えがあるんだろうよ。軽はずみにそんなことを口にすりゃあ、とんでもねえ罪に問われるとでも思ってるんだろ」

A「何でえ、その罪でえのは？」

B「うん、公然あいさつ罪さ」

5

爺さん「物を大切に、質素な生活をするのは、とても大事なんだよ。第二次大戦中には『欲しがりません、勝つまでは』とか、『贅沢は敵だ』なんて標語を唱えさせられたもんだ」

孫「あつそう。カツまでは欲しがらないで、コロッケならいいの。ピフテキは贅沢なんで、細切れ肉の炒めたあたりで我慢すりゃいいんだね」



6

甲 「やつとアメリカの大統領が決まったな」

乙 「両陣営とも死力を尽くしたってとこだ。あんまりブツシュイ（無粋）なこたあ、やりたかねえと思いながら、背に腹は替えられねえだとき」

甲 「うん。投票のやり直しをゴアさん（御破算）で願いてえなんて意見もあつたそうだが、とにかくお疲れさま」

7

単身赴任者 「いやあ参った。残業してアパートに帰ったら、炊飯器は空っぽ、冷凍食品は皆無。どうすりやいいの」

冷静な同僚 「そんなこと聞かれても無いものは回答（解答）できねえや。オマンマにありつけないことも、ママ（間々）あることだわな」

8

「長き世の遠の眠りの皆目覚め、波乗り船の音の良きかな」つてえ回文の傑作がありますな。

この手のものは、実に心楽しいお遊びと申してよろしいようで、世の中にご自分で一生懸命創作してらっしゃる向きもありまして。歌謡曲の文句にも「世の中、馬鹿なのよ」なんてのもありましたよ。

そう言やあ、うちの編集主幹の名字も、これらと同類項でやんす。曰く、イシイ。

9

おばさん 「わあい、節分のワクワク・プレゼントの受付けだ。大勢来てるな。さあ並ぼう」

お婆さん 「何？ メイワク・プレゼント、ほんまやな。賞品いうたかて、くだらねえ物ばつかしや。そんなもん、鼻汁（はな）も引つ掛けねえや」

おばさん 「いやいや。引つ掛ける人もいるから、ビリ等にティッシュペーパーが、あるんやないの」

10

熊さん 「おお、八つあんでねえの。元気か」

八つあん 「それが、ドエレエことだよ。血栓症なんだよ。何でも、血の巡りが悪くなって、足がむくんだりするんだわな」

熊さん 「そりや、いけねえな。まあ、大事にしろや。済まねえが、見舞金は、出せねえなあ。知ってのとおり、こちとらは、ずつと前から欠銭症だあ」

オロオロの俳句

アルハンブラ 真冬のパーティオ 水静か

（2001年1月、石井赴夫・寿子夫婦はスペインに旅して、グラナダの宮殿を訪ねた）

11

A 『故郷』って唄、みんなよく歌ってるなあ」

B 「ああ知ってる、知ってる。兎が出てくるよな。こないだ、あれは兎の肉がおいしいって意味だなんて言う奴がいたが、とんでもねえこった」

A 「兎追いしーかの山。なるほど」

B 「感心してちやあいけねえ。山に長く住んでたもんで、兎も年取っちゃまったんだよ。だから本当は、兎老いしかの山なのよ」

A 「?！……」

12

若い衆 「先だつての新大久保駅での救助転落事故は、何とも痛ましいことでしたねえ」

老人 「全く。この頃は他人様がどうなつていようと知らん顔が多いなかで、あんとき助けに飛び降りた2人はすごい立派な方だ。

それにしても、我々は普段声を掛け合わねえなあ。ヒトゴト（他人事）だと思つても、危ないときにやヒトコト（一言）口から出ずのがいいと思うよ」

オロオロの俳句

ツアーバス オリーブ畑を まっしぐら

13

甲 「以前は女優の名前を並べると、原節子、高峰三枝子、若山セツ子でな具合で、〇〇子が断然多かつたな」

乙 「ホントニ。そこいくと今今は、女優、タレント、歌手どれでも安達祐実、水野真紀、浜崎あゆみ、安室奈美恵……。『子』は広末涼子、伍代夏子…、僅かだな」

甲 「うん、まさに少子化社会だ」

14

A 「大勢の人が海外へ行くようになったなあ」

B 「うん、アメリカ行きは渡米、フランスは渡仏か」

A 「海外は沢山あるが、そんなかで間違いなく到着するのは何処だか分かるか」

B 「そんなの楽勝だあ。ドイツさ。ト・ド・ク」

オロオロの俳句

彼岸過ぎ 悲願の学位 貰いけり

ボロボロの川柳

願掛けた 本読み終えて ド近眼



15

息子「もう暫く、パラサイト・シングルのまま厄介になるから、よろしく頼むね」

親父「何だと、パラシュートにぶら下がるってか」

息子「違うよ。親の脛をかじる寄生虫生活ってことよ」

親父「わざわざカタカナ言葉を使うことあねえや。それなら昔から自立神経失調症でえんだ」

16

A「いやあ、最近あつちやこつちやで震度5だの4だの、地震が多発しているなあ」

B「全く。明日は我が身に降りかかるかも知れねえ。せいぜい危険予知や緊急事態対策を心掛けにやあならん。お前さんはどんな準備を？」

A「うちじゃあ自信満々のカアちゃんが充分手立てを講じているから万全だ。信度100%だわ」

オロオロの俳句

五月晴れ カ士の鬚も 艶を増し

ボロボロの川柳

メーデーを とことん祝って 酩酊し

17

警官「免許証、携帯してますね……ハイ結構です。それから運転中は電話しないように、充分気を付けて下さい」

ドライバー「ヨーク分かってます。ケイタイは、不携帯にしているから大丈夫だヨーン」

18

朋世「あれエ、このドリンク券、今日が期限なんだ。喉かわいてないけど飲んじゃお」

波江「バーカ。もつと早く言やあ使ってやったのに。いいから捨てちまいなよ」

乗香「そうよ。勿体ないからだとか、片付けなくっちゃだとかって、カラダに余計な負担させるなんて。七転八倒だよ」

朋世「ご忠告ありがとう。だけど使い慣れない言葉はよしたほうがいいよ。それも言うなら本末転倒ってんだ。ドジ！」

オロオロの俳句

満を持し ジューンブライド めとりけり

(まじめ)

ボロボロの川柳

太りすぎ 座布団外へ けつを出し

(フザケ)

婆さん 「わあ、こりや安い。行ってみようか」

爺さん 「何、1人1泊2千円？ それで？」

婆さん 「食事なし、風呂なし、共同便所ありだつてさ」

爺さん 「ひえー、安かろう悪かろうでねえの。それじゃ、宿泊する前に四苦八苦だわ」

甲 「結構なお花をいただきどうも有難う。ところで、これ何てえんです？」

乙 「胡蝶蘭ですよ。ご存じなかった？」

甲 「いやあ、生れて初めて見ました。こんなに美麗で清楚で素晴らしいとは。この世のものと思えません」

乙 「まあ、大層なお言葉で。そのうちに『いしい平均』に誇張欄を作ってもらいましょうか」

オロオロの俳句

梅雨空に 燕すいすい ツーリング

ムチャクチャの都々逸

梅雨どき生れも 目出度いものよ

ハッピーバースデー ツーユー

後輩 「アチ、アチ、アチイ。言うまいと思えど、……何だっけ」

先輩 「あんまり暑いで頭の中がぶっ壊れたか。俺なんざ心頭を滅却すれば……あれエ出て来ねえや。何だっけ」

後輩 「サムーイ」

娘 「この前買った靴、もう流行遅れなんだけど、捨てちゃつていいかなあ」

母親 「馬鹿言うんじゃないよ。代わりに履く分もないんだろ。裸足で歩くのかい？」

娘 「ううん、靴下だけで」

母親 「そんないい加減な……。だからルーズソックスなんて言われるんだよ」

ボロボロの川柳

盆休み 開いてる店の ありがたき

ムチャクチャの都々逸

鍵は大事よ 落とさぬように

みんな充分 キーつけて



司会者 「それでは、中井明夫氏をご紹介申し上げます。中井さん、どうぞ」

中井氏 「エー、只今、」

(続けて『ご紹介にあずかりました……』とかナントカ言おうとしたが、絶句)

大向こうから途端に

「お帰りなさい」

23

中学教師 「さあみなさん、新学期です。張り切ってスタートしましょう。この問題のできる人は、手を挙げて下さい」
中学生 「ありがたいお言葉ですが、夏休み中張り切っていたので、今日は音をあげてます」

24

ボロボロの川柳

敬老の 日だ童心に ケエロかな

ムチャクチャの都々逸

まん丸お月様 食欲そそる

月見うどんに 目玉焼き

25

夫 「謹賀新年。初春。どれがいいかな」

妻 「エッ、年賀ハガキの印刷？ 早過ぎるんじゃない」

夫 「いやいや、民営化の前に官製ハガキで完成しとかなきゃ」

凸凹兄弟の五十音問答

凸兄 「あさだ起きろ。」

あしを洗え。その世界から。

あすからまともに暮らせ。

あせ水たらしして働け」

凹弟 「あそー」

悩める短歌

お弁当 作るかよそうか 運動会

気象情報 ばかり聴いてる

スットン狂歌

携帯を 切ったつもりが ONのまま

とんでもない時 トンデモナイ音

編集長「こないだ自分史を作りたいと言ってたお客、その後どうかね」

営業マン「はい、自費出版での見積もりを見せたら、『いま出すこともないんだが、あんた達が可哀相だからオーダーしてやろうかな』ですって」

編集長「なんだって、それじゃ慈悲出版だわ」

主婦A『昔々お婆さんは川へ洗濯に』から、新しく開発されたっていう無洗剤洗濯機まで、洗濯は人類の歩みとともに在りだわね」

主婦B「どんな方法でやるか、選択肢は山ほどあるのね」
主婦C「そうよ、これからもいい知恵や技術がどんどん目の目を見るでしょう。そのうちに一級洗濯士なんて国家資格が設けられるかもね」

部下「私の乗る予定の飛行機、台風で欠航になりました」

部長「それで？」

部下「しかし、この仕事、ポストポーンできませんから、出張は決行したいと思います」

部長「よし、結構」

元野球少年「たいしたもんだね、マスターズリーグの村田投手、まさかり投法健在だよ」

アマ評論家「確かに。だが彼もトシだなあ」

元野球少年「そうかなあ。どうしてわかった？」

アマ評論家「だって、マウンドで老人バググ使ってたもん」

編集主幹「こういうご時世だからこそ、わが社の存在価値がますます大きくなるんだ」

スタッフ「高き理想に向かつてのご発言でしょうが、こんな売上じゃあとても長持ちはできませんよね」

編集主幹「それじゃあ、もうやめようってか？」

スタッフ「ええ。でも取引の負債もあるし、困っちゃまうなあ」
編集主幹「そんなの此方こちらで拝み倒して、逆に拝観料（廃刊料）を貰えばいいんだ」

娘「わあいわあい。当たっちゃった。大当たり」

母親「なんだい。はした無い」

娘「海外旅行、1週間3食昼寝付きだ」

母親「そりゃいいや。私におくれ」

娘「とんでもない。タイガイにしてよ」



32

甲 「明けましておめでとう。今年もよろしく」

乙 「とても真面目なご挨拶をどうも。こちらとは、少々ふざけて、昨日が旧年。恭賀（今日が）新年」

33

爺さん 「婆さんや、まだ山には行かないのかい？」

婆さん 「ええ。ところで、お前さんは何故川へ出かけないんだい？」

爺さん 「俺みたいな新米の洗手（せんしゅ）じゃあ川の汚染がひどくなって駄目だったよ。それで洗濯業から足を洗ったのさ」

婆さん 「そうかい。私もビギナーで、余計な芝をしぼしぼ刈っちゃうもんだから、ゴルフ場に行かないまままで済んだフリをしてるのさ」

34

幼稚園児A 「結んで開いて、手を打って結んで…、えーと次なんだっけ」

すると隣にいた幼稚園児B 俄かに両足を広げて「股開いて、だろっ」

ムチャクチャの都々逸

正月興行 華やいでるね

羽織袴に お振袖

35

呑気な父さん 「さあ節分だ、豆撒きた。威勢良くやろうぜ」

横丁のテイラー 「ああ、伝統的な行事だ。古きをたずねて新しきを知るか」

呑気 「何だって。古着屋を訪ねて新しいのを着る？ スーツの下取りかい」

横丁 「うんにや、違う違う。そうだ、この際俺の店の宣伝をやらせて貰おう。服はーウチ」

36

師匠 「この頃いろんなどこで偽の1万円札が使われてるってなあ」

弟子 「穏やかじゃないすね。ところで、芸人に偽物が出てくるようになるよ、その人は相当のもんだてーますね」

師匠 「確かに。全盛時代の美空ひばりには全国あっちこちに美空ひばりや美空ひばりがいたなあ」

弟子 「こりや、ここにいてうだつが上がらないより私も偽物のプロモーターをやるほうが…、浜崎めゆみだとか、松かた子だなんて面白いでしょう」

師匠 「あほー、お前が胴元じゃあせいぜい偽2千円札ぐらいだろっよ」

ボロボロの川柳（2月15日に残り物を掴まされて）

あんまりだ このチョココレート

ちよっと Late

お代理様 「3月3日付けで部長代理を命じられた。なんとかリストラ対象から外れたようだ。やれやれ」

誤認ばや氏 「甘い、甘い。お前さんの仕事は多分自分のリストラプランの作成だよ。お白酒に酔ってる場合じゃあないよ」

お代理様 「左様か。こりやたまらん。さんざん(3・3)な日だったなあ」

少女1 「さあ、アルバイトだ。コスチュームはこれで良しとマニユアル本もケイタイもオツケー」

少女2 「マニユアル本？ どのなの、ちよつとみせてよ。何これ……目茶苦茶じゃん」

少女1 「うん。マニアックな店長でさ、自分の好きなことだけ、つまみ食いで載せてるのさ」

少女2 「なーんだ。それならマニユアル本じゃなくて、狂科書って言うんだよ」

オロオロの俳句

これからだ コメンスマメントの 弥生かな

ボロボロの川柳

春なのよ マーチに待った 三月だ

少年A 「野球部とサッカー部とどっちがいいかな。誘われて迷ってるんだ」

少年B 「そりや野球部だよ。手が使えるもん」

少年A 「そうかい、手がそんなに大事かい？」

少年B 「監督が言ってたよ。投手、捕手、内野手、外野手みんな手だ。愈々となれば奥の手だって」

少年A 「でもサッカーのほうがカッコいいもんな。よし、ゴールキーパーをやるう」

少年B 「勝手にしろ」

公園でのアナウンス 「今月は『みどりの週間』もあります。木を植えましょう」

お先棒を担ぐ男「いいね。やろう、やろう。植樹だ、植樹祭だ」
耳は遠いが胃の強い男「おー、いいね。食おう、食おう。食事だ、食事祭だ」

スットン狂歌

エイプリル フールにゃ一発 大法螺と
思っているうち もう二日なり

ボロボロの川柳

どれがいい 花か団子か 両方か



41

社長「いい陽気になったが景気のほうは相変わらずだな」
やたら横文字を使いたがる専務「グローバルゼーションに
デフレスパイラル、リストラにペイオフ、ベアゼロにワー
クシェアリング。初対面のお客ばかりで、どう応接すれば
いいのやら」

血気盛んな末席ヒラトリ「丁度夏場所ですが、相撲だって
初顔の取り組みこそ面白いし感動を呼ぶんですよ。バンバ
ンやればいいんです」

ノ一天氣の監査役「おっしやるとおり。陽気も景気も山あ
り谷あり、呑気に元気に勇氣を持ってやればいいのさ。氣
にしないことよ」

42

妹「お姉ちゃん、もう流行追っかけるのやめたの？」

姉「ウン、顔黒もルーズソックスも厚底靴も飽きちゃった
よ。もともとヒトサマが先にやって流行ったものを後追
するなんて性に合わないやね」

妹「そんならこれからは何やって楽しむの？」

姉「とても良い質問です。私が日本のヤング・ファッショ
ンを創造するのよ」

妹「そおお？ぞおおっとしちやって、想像もつかないわ」

43

娘「凸凹公園へ行つて来まーす」

母「今日は何があるんだい？」

娘「凸凹学園後援会主催の講演会を聴いてから歌謡ショ
公演を観るのよ」

母「こうえんのオンパレードだね、まいいか。エンコウは
駄目だよ」

44

旅人「恐れ入ります。ちょいと伺いますが、西区249番
地てえのはこの辺りでしょうか？」

土地の人「うーん、何町何丁目か分かんないのかい？」

旅人「ええ。地名は、こんだけなんです」

土地の人「さよか、無理だわ。致命的だあ」

45

甲右衛門「おい、もう出陣の刻限じゃ。いざ表へ」

乙兵衛「お待ち下され。これから廁へ」

甲「何じゃと、本日も又そのような…遅すぎるぞ。天罰が
下るよう念じてくれん」

乙「いくらノロイからとてそりゃ殺生な。お言葉を返すの
は不本意だが、こればかりは…」

甲「何を返上するとな？」

乙「へっへっへっ。呪いの言葉をネ！」

甘党「さあ、ケーキ・バイキングだ。ばんばん食べるぞ。シフォンケーキ、ミルフィーユ、モカクリーム：いいな、いいな」

辛党「何ーい？ 景気にばい菌だと。それに資本家の景気をばあんばあん食って、冬を見るってか。おまけに目下クレームが『いいな』なんぞとほぎきやがって。このかぼちゃ野郎」

甘党「南瓜やろうだった？ ありがたい、かたじけない。パンプキンも大好物さ。」

辛党「うぬ、こうぶつ？ ちやうわい。おめえはどうぶつで、そこらに並んでるのはしよくぶつだぞ」

夫「うはっはっは。うはっはっは。こりや面白い、こんな漫才初めてだあ」

妻「また派手に笑ったね。呵呵大笑ってとこだね」

夫「いやいや、お前だったら『かかあ大笑』だが、わしのは『パパ大笑』さあ」

ストトン狂歌（サ行の折込み）

サッカーが 終了した後 すぐ開始

成功選手の 争奪合戦

（2002年5月～6月、ワールドカップ日本・韓国共催）

主将「いよいよ本大会だ。気を引き締めていこうぜ！」

エース投手「そうだ。1年間この試合にかけてきたんだからな！」

新入の1年生部員「分かりました。ひき算とかけ算でやればいいんですね」

A「夏休みになったが、先立つものが無いからアルバイトをしなきゃ」

B「大変だな。そういう時こそ生活の知恵を出さないと駄目だぞ。知恵のタネなんぞそこらに嫌っちゅうほど転がってるんだからな」

A「へーえ。偉そうなせりふを吐きやがる。どんな知恵があるんだ？」

B「なんてったって節約だ。使わぬ、減らさぬ、出さぬ：これに限る。相撲とる時は、ひとの種でな」

A「何が節約だ。それじゃ唯のケチじゃんか」

B「はっはっは。俺は嘘はつかねえ、嘘は泥棒の始まり、ケチは金持ちの始まり。まあ夏休みだ。無駄口も休み休みたこう」

ストトン狂歌（国際山岳年の夏）

瀬をはやみ 岩にせかるる 谷川の

冷たい水を 飲む山男



50

マネジャー「この書類は極めて重要だ。永久保存にソートしといてくれ」
サブマネ「へっ！これをですか？ 年中行事の定番モンですよ」
マネ「俺がジャツジだ。えいきゆうだ」
サブ「そう興奮されないで。仕方無いすね、私の責任でソートB級保存にしときましょう」

ボロボロの川柳

平均台 ふらふらしながら 五十回

51

売れない役者「さあドサ回りの旅支度だ。まあこんなもんなかな」
その妻「あら何ですな、こんなにくだびれちまった衣類ばっかしで」
その夫「これじゃあ恥ずかしいだど？ なんのなんの、恥の足袋は履き捨てだあ」

ムチャクチャの都々逸

暑過ぎたんだよ 今年の真夏
だから残暑は 気持ちだけ

52

父親「可愛い子には旅をさせる…なんて言うからウチの坊主にもどっか行かせるか？」
母親「いいわねえ、じゃあ2泊3日で考えましよう」
父親「そりや駄目だ、腕白坊主だから1泊だけよ」

53

「こころとこころ会社の不祥事でえやつが次々と表沙汰になつてますなあ。上場一流企業のこんなザマ、情けねえやら腹立たしいやら本当に嫌になつちやうねエ。」
ニュースを読んできると、年寄りが威張つてて良くなるものも駄目にしちまう場合が随分目立ってますよね。自惚れと保身の塊りみたいなの醜悪老人が多すぎますな。そんなに自己顕示したけりやてめえの蠟人形でも造つて、後は隠居になるがいい。ロウ害は出来るだけ少なくなきゃね。

54

社員甲「夏休み、取ろう取ろうと思つてうち9月になり、前期末だからあれもやつてこれもなんて欲張つたら、もう10月だあ」
社員乙「何をもたつてゐるんだ。俺なんか8月と9月と両方で取つたぜ」
社員甲「へえー、ハチクの勢いだな。それにひきかえ、こっちはクジュウの選択か」

55

娘「お父さんたら12時間も飛行機に乗って来たんだから、しばらくは時差ぼけで大変だろうね」

母親「いーえー、あの人は老化しちゃって普段から爺さんぼけだから平気さあ」

56

若い衆「プロ野球日本シリーズ観たかい？ 東京と所沢とを行ったり来たりてえのは詰まらねえなあ」

ご隠居「じゃ、どうやりやあ詰まるんだい？」

若い衆「どのチームが優勝しても今年は札幌と那覇でやる、来年は仙台と高知で……な具合に決めとくんだよ。そうすりや全国巡回でいいじゃん」

ご隠居「国営野球じゃないんだから出来るわけがないよ」

若い衆「さよか、素晴らしいアイデアと思ったのに日本シリツボミかいな」

57

甲「うちの孫つちよで勤労感謝の日に生まれたのがいるんだ」

乙「ほーっ、そりやめでたいな。総領かい？」

甲「いや、2番目だが長女さ」

乙「おー、その子の兄貴は良い奴に違いない」

甲「なぜ？」

乙「11・23だからイイニイサン」

58

かみさん「さあけ(酒)を愛するひいと(人)は、いいのち(命)棄てる人オー」

亭主「な何だと、ご詠歌か？」

かみさん「いいえ、替え歌『死期の唄』よ。気違い水はお止めになつたらどーお」

亭主「いやいや、そう簡単に百薬の長と別れるわけにはいかん」

かみさん「勝手な言い分ばかり。少しは真面目に考えて頂戴よ」

亭主「さよか、ほんなら日によつてはサケるように致しましょう」

59

使用人「この年末年始は9連休ですね。クニへゆつくり帰れます」

使用者「おっとどつこい、そうはいかない。リストラでこれだけしか人がいないんだから4日間くらい休日出勤して貰わないと」

人「そんな殺生な！ せめて1週間休ませて下さいよ」

者「うーん、じゃあ2日間キセイ(帰省)緩和としようか」

60

世話役「お稽古、お疲れ様でした。さあお昼にしましょう」

出演者「どうもどうも。お世話になります」

世話役「お品書きを、ハイ。どうぞお好きな物を」

出演者「じゃあ、私は太鼓をやってますからハヤシ(囃子)ライスをお願いします」



凸凹兄弟の五十音問答

凹弟「兄貴、久し振りの問答だな」

凸兄「1年空いたな。今度はお前からやれや」

弟「よっしゃ、年始の旅立ちだ。持ち物は、カサ、キー、クツ、ケース、コートさ」

兄「了解、行商ご苦労。せいぜい稼業（カ行）をしっかりな！」

（本屋の店先で）

61

客A「この分厚いやつが『××評論』の新年特大号か？」

客B「そうだよ、さっき店員が言ってるここに積んでつたからな」

A「さよか、だが表紙無しでいきなり目次、こりや何じゃ？」

B「紙の節約、中身で勝負ってとこだらうよ」

A「へえー驚いた、拍子抜けだあ」

62

甲「『長崎の夜はむらさき』の歌詞に『そんな気がして、そんな気がして』というくだりがあるが、ホント損するようない気持ちになるなあ」

乙「だったら歌謡曲のコンサートじゃなくて、得する催しに行きましょう」

甲「どんなイベントだ？」

乙「トークショウさ」

63

男「おー冷えるなあ、ストーブはどうした？」

女「知らないの、壊れてストップよ」

男「洒落にもならねえ。炬燵か火鉢でも出せよ」

女「あれは苦労しないさ。まあ、どてらにジャンパー重ねて着いたら」

男「ひえー、そりゃ全く乱暴（暖房）だわい」

64

買い物客「パンに付けて食う甘味のあるものちゅうと何がいいかね？」

店員「ジャムかフルーツブレッドあたり如何でしょう」

客「ジャムは分かるけど、もう1つは何だつて、フルスピード？」

店員「いえいえ、この壇詰めをご覧ください」

客「なになに、フルーツブレッド（マーマレード）か。

はなっからマーマレードって書きやあいなんだ、あまり格好（カツコ）付けんよ」

65

読者「貴紙はもう30号くらいになってますか？」

編集部「有難うございます。お蔭様でこの2月に28号目を出します」

読者「ほー、通巻28号ね。さしあたり30の大台を目指して頑張ってください」

編集部「どうもどうも、せいぜいマンネリに陥らないよう努力しなければと痛感しております」



66

ご隠居 「松の廊下の『殿中でござる』から302年、いろいろで始まる仮名手本忠臣蔵。独参湯と言われるこの芝居、およそどの小屋にも掛からずに1年が終わるなんて年は無いね」

小僧 「永遠のドル箱番組でやんすねえ。ご隠居さんのように詳しいと、色んな人からやれ判官の、それお軽のと質問攻め。一体どれくらい頻繁に尋ねられます？」
ご隠居 「年中でござる」

67

呑み助 「アメリカ人もロシア人も酒強いねえ」

上戸 「狩猟民族あがりだ、はか(酒量)がいくわけよ」

呑み助 「そこいくてえと、日本人は下戸に近いなあ」

上戸 「いやいや、それでもねえよ。最近はこのくのある濃いやつ飲んでるぜ」

呑み助 「ふーむ、そうか。農耕(濃厚)民族崩れだな」

68

見学者 「ここがメロドラマ撮る所ですか？ いろんな部屋があるんですね」

案内人 「ええ、こっちは大部屋、あっちが主演女優のいる所です」

見学者 「ほーっ、女主人公やる人はこんなでっかい部屋を使ってるんすか？」

案内人 「はい、彼女のは広いん(ヒロイン)です」

69

中山 「石井さんは麹町中学出身ですよ」

石井 「ええ、それで？」

中山 「どんな校舎でした？」

石井 「いやあ、敗戦直後で自前の校舎が無くてね。いつ建設されるかも分からなかった。だから、工事待ち中学だったわけ」

70

彼氏 「春だ、桜ばかりじゃなくて菜の花もいいね。千葉の県南の方へドライブしようか」

彼女 「いいわね、サンセイイ！ だけど暴走(房総)しないでネ」

71

主催者 「さあ皆さん、食材持ち寄りのパーティー始めますよ。あなたは何を？」

参加者A 「キヤベツとほうれん草を持って来ました」

B 「マトン、それからトンマつまり豚肉と馬肉を少々」

主催者 「素晴らしい！ そちらは？」

C 「適切な食材が無くて、贖罪のために携帯用の天火を持参しました」

主催者 「そりや大変でしたね、どうも」

C 「いえいえ、オーブン(応分)の協力つてとこで」